

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：30122
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22592514
 研究課題名（和文） 若年の母親への育児支援
 —母子相互作用促進のための縦断的介入研究—
 研究課題名（英文） Childcare support for adolescent mothers: longitudinal intervention
 study to improve mother-child interactions
 研究代表者
 草薙 美穂（KUSANAGI MIHO）
 天使大学・看護栄養学部・准教授
 研究者番号：90326554

研究成果の概要（和文）：

本研究は、乳幼児期の子どもを持つ若年（10代）の母親を対象として継続的な育児支援を行い、若年の母親とその子どもの母子相互作用（母子関係）の特徴と、母子が必要としている育児支援について検討した。若年の母親は、生活経験・体験が不十分なため、育児全般の支援が必要であること、母子相互作用を促すために子どものサインを読み取る知識を提供することが円滑な母子関係を築くために必要であることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

In this study, we provided continuous childcare support to adolescent mothers who raised infants in order to investigate the characteristics of interactions between them and their children (mother-child relationship) as well as childcare support required by dyads. The results revealed that adolescent mothers need general support in childcare since they do not have sufficient experience of living, and that it is necessary to provide mothers with knowledge to understand cues from their children, which will improve their mother-child interactions and hence develop a smooth relationship.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：若年の母親・母子相互作用・育児支援

1. 研究開始当初の背景

わが国では女性の高学歴化と社会進出およびそれに伴う晩婚化が進み、そのことが少子化の一因とも言われている。平成 17 年の年齢別出生率（厚生統計協会，2008）は、30～34 歳が 85.6%と最も多く、社会現象を裏付ける結果となっている。一方、若年の母親といわれる 10 代（15～19 歳）の出生率は 5.2%であり、全体に占める割合は多くないものの、1990 年代は 3%台だったものが 2000 年以降は 5%台と増加傾向にある。

多くの女性が高学歴で就労している中で、若年の母親は育児のため学業を継続することや就労することが困難な状況にあることが推察される。つまり社会的自立や経済的自立が十分とはいえない。また、若年の母親は心身の成長発達段階の途中にあり、青年期という時期に育児をすることは大きな負担となることが推察される。

ハイリスク母子の因子として若年の母親、低学歴、低所得者等があげられており、さらに若年の母親は育児に関する経験や知識の不足から育児・養育行動に問題を生じ、子ども虐待につながるものが指摘されている（廣瀬，2003）。

このように、若年の母親は年齢別出生率の中では少数であるが、ハイリスク母子として着目すべき対象であり、健全な母子関係を築くためには特別な育児支援の取り組みが必要であるといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は若年の母親を対象とした縦断的研究を子どもが生後 1 ヶ月から 12 ヶ月まで実施し、若年の母親とその子どもの母子相互作用の特徴、子どもの発達との関連について明らかにすることであり、具体的には以下の 3 点を明らかにする。

- (1) 蓄積している母子のデータと本研究で得た若年の母親の母子相互作用の比較
- (2) 子どもの各月齢（1・3・6・9・12 ヶ月）での母子相互作用と子どもの発達との関連
- (3) 若年の母親とその子どもが必要としている育児支援内容

3. 研究の方法

(1) 対象

本研究に協力の承諾が得られた札幌市内とその近郊の医療施設に 1 ヶ月健診で受診している若年の母親（15～19 歳）とその子ども 25 組。

(2) 方法

子どもが生後 3・6・9・12 ヶ月時に子育てサロンを開催、必要時は家庭訪問し調査を実施。子どもが生後 1 ヶ月から 12 ヶ月までの間、定期的（1・3・6・9・12 ヶ月時）に家庭訪問を実施し、育児支援を行う縦断的介入研究。

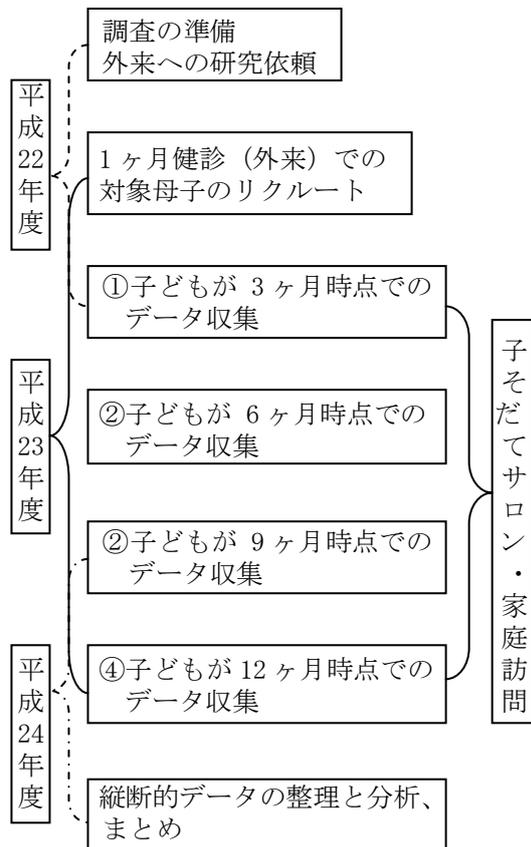
(3) データ収集

① 質問紙と聞き取りによるデータ収集

- ・母子の属性、家族の属性（研究者作成による）
- ・育児ストレス（日本版 PSI）
- ・子どもの発達（津守・稲毛乳幼児精神発達質問紙）
- ・社会支援（Network Survey）

② 観察によるデータ収集

- ・母子相互作用（NCAST）：自然な母子の遊び場面と食事場面を録画し、コーディングする。



※途中で 20 代になった母親の群も追跡調査を実施

(4) データ分析

収集したデータは、すべて数値化し統計解析ソフトに入力後、分析する。

(5) 本研究で用いる用語の定義

- ・若年の母親：10 代（15～19 歳）までの母

親をいう。

- ・母子相互作用：母子の遊び場面と食事場面において観察された日本版 NCAST 得点。
- ・子どもの発達：津守・稲毛乳幼児精神発達質問紙を用いて算出された発達年齢。

(6) 倫理的配慮

本研究の対象者である母親は 10 代、その子どもも未成年者である。未成年者は法定代理人の親権に服することになっているため、研究の承諾と同意書は母親本人と親権者から得る必要がある。しかし、民法 753「条婚姻による成年擬制」において未成年者が婚姻した場合、私法上は成年に達したものとして扱われることを適用し、以下の方法で研究の承諾と同意書を得ることとする。

- ① 対象者が婚姻している場合:対象者(母親)に承諾を得て、同意書に署名をしていただく。
- ② 対象者が婚姻していない場合:対象者とその親権者(両親)の承諾を得て、対象者と親権者に同意書に署名をしていただく。

研究協力を依頼する際、以下の倫理的配慮を行うことを説明する。

- ① 研究途中でも辞退することが可能
- ② 得られたデータは、数値による処理を行い個人が特定されることがない事。
- ③ 情報は研究以外の目的には使用せず、研究成果は専門職が参加する学会等での発表として公表するが、守秘義務の配慮を行う事。
- ④ 研究期間中に母子の異常が認められた場合、すみやかに関係医療機関に連絡する事

なお、本研究実施にあたっては、研究代表者の所属する研究倫理委員会の承認を得ている。

4. 研究成果

(1) 研究の経緯

本研究は、平成 22 年度の準備期間に対象者のリクルートおよび育児支援の開始を試みる予定であった。しかし、乳幼児期の子どもを持つ若年の母親の協力を得ることができず、計画していた家庭訪問の実施および調査を行うことができなかった。

平成 23 年度は前年度の評価をふまえ、調査方法を家庭訪問から子育てサロンに変更し、内容の修正を行い実施した。しかし、平成 22 年度と同様に対象者のリクルートが難航し、子育てサロンを開催することができない状況にあった。

平成 24 年度は子育てサロン形式は変更せず、リクルート方法の改正を行うこととした。リクルート場所の拡大(乳児健診以外の小児

科受診者も含める)、PR 方法として小児科外来にパンフレットの設置、インターネットでの広報活動を追加、子育てサロン開催時のテーマ設置の吟味などの工夫を試みた。しかし、最終年度も定期的な子育てサロンの開催には至らなかった。

(2) 成果

本研究の対象者のうち危機的状況(虐待)となった若年の母親とその子どもの事例から、若年の母親とその子どもの母子相互作用の特徴と、必要な育児支援について検討した。

- ① 日本版 NCAST (Nursing Child Assessment Satellite) により母子相互作用を定期的に観察した。日本人の母親のデータベースと比較すると 10 代の母親とその子どもの NCAFS (授乳・食事場面) と NCATS (遊び場面) の何れも総合得点において低い値を示していた(表 1)。さらに、虐待の発生前に得点の低下が顕著であったことが見て取れた。

これらの結果から、10 代の母親は子どもとその子どもの母子相互作用得点は低いという特徴があるといえる。特に母子のやり取りの中で、お互いのアイコンタクトや母親からの声かけが少ない傾向にあるときには、ハイリスク母子として援助の必要がある。

表 1 NCAST 得点の比較

	日本人 の母親	10 代 の母親
NCAFS 平均総合得点(76) ^a	58.60	49.75
NCATS 平均総合得点(73) ^a	55.97	44.80

a: 取り得る最大得点

- ② 若年の母親は、生活経験・体験が不十分なため、育児全般の支援が必要である。また、シングルマザーで夫の支援や周囲のサポートを得ることができなかつたり、生活保護を受給し経済的に不安定であるなど、生活そのものに不安を抱えていた。さらに社会資源の活用を行うことが少なく、母子が孤立する傾向にあった。そのため若年の母親が自立して生活ができるよう情報提供を積極的に行う支援が必要である。

母子相互作用においても前述の特徴から、母親が子どものサインを読み取るための知識を提供することが必要である。子どもの成長に伴う cue (乳幼児期の非言語的サイン) を理解してかかわることができるよう援助者が具体的な手本を示すなどの支援が必要である。

本研究は、計画していた対象者数を得ることができず、現時点での研究結果を一般化す

ることはできない。今後は、さらに対象者を増やし、若年の母親の育児支援の方略を確立するようにしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 草薙美穂、10代の母親への乳幼児精神保健介入ー虐待に至った10代の母親への支援、日本乳幼児医学・心理学研究、査読無、Vol. 21 No. 2、2012

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[その他]

文部科学省科学研究費助成事業(乳幼児保健学会共催)国際ワークショップ、話題提供者、2012

6. 研究組織

(1) 研究代表者

草薙 美穂 (KUSANAGI MIHO)
天使大学・看護栄養学部・准教授
研究者番号：90326554

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

廣瀬 たい子 (HIROSE TAIKO)
東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・教授
研究者番号：10156713

三國 久美 (MIKUNI KUMI)
北海道医療大学・看護福祉学部・教授
研究者番号：50265097